第21回 夏期福音特別集会（4）（伊豆高原浮山荘）

悲願本願

――ペテロ前後書――

１９７４年８月２５日
小池辰雄

世の終りの希望　活ける石　人間の福音的実存七相　此岸を彼岸として生きる　愛は掩い包み
担う　御霊の自由　無者らしく　再臨のキリストを迎える　パウロからの示し（異言）　最後の
日の予表　（詩）「国民の歌」

【ペテロ前2】

1されば凡ての悪意、すべての詭計・偽善・嫉妬および凡ての謗を棄てて、
2いま生まれし嬰児のごとく霊の真の乳を慕え、之により育ちて救に至らん
為なり。3なんじらは既に主の仁慈あることを味い知りたらんには、然すべ
きなり。4主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。5な
んじら彼にきたり、活ける石のごとく建られて霊の家となれ。これ潔き祭司
となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲を献げん為なり。
6聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依り頼む
者は辱しめられじ』とあるなり。

【ペテロ前4】

7万の物のおわり近づけり、然ば汝ら心を慥にし、慎みて祈りせよ。8何
事よりも先ず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩えばなり。9また吝む
ことなく互いに懇ろに待せ。10神のさまざまの恩恵を掌どる善き家司のごと
く、各人その受けし賜物をもて互いに事えよ。11もし語るならば、神の言を
語る者のごとく語り、事うるならば、神の与えたもう能力を受けたる者のご
とく事えよ。是イエス・キリストによりて事々に神の崇められ給わん為なり。
12愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として
怪しまず、13反ってキリストの苦難に与れば与るほど喜べ、14もし汝等キリス
トの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじ
らの上に留まり給えばなり。

【ペテロ後1】

12されば汝らは此等のことを知り、既に受けたる真理に堅うせられたれど、
我つねに此等のことを思い出させんと為るなり。13我は尚この幕屋に居るあ

いだ、汝らに思い出させて励ますを正当なりと思う。14そは我らの主イエス・キリストの我に示し給えるごとく、我わが幕屋を脱ぎ去ることの速かなるを知ればなり。……16我らは我らの主イエス・キリストの能力と来りたもう事とを汝らに告ぐるに、巧みなる作話を用いざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。17いとも貴き栄光の中より声出でて『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』と言い給えるとき、主は父なる神より尊貴と栄光とを受け給えり。……19斯て我らが有てる預言の言は堅うせられたり。汝等この言を暗き処にかがやく燈火として、夜明け明星の汝らの心の中にいづるまで顧みるは善し。……21預言は人の心より出でしにあらず、人々聖霊に動かされ、神によりて語れるものなればなり。

【ペテロ後3】

8愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。9主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。10されど主の日は盗人のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にある工とは焼け尽きん。11斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、12神の日の来るを待ち、之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。13されど我らは神の約束によりて（キリストの）義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。

●世の終りの希望

「木喰の袈裟や衣は破れても未だ本願は破れざりけり」

いくつか好きな歌がありますが、そのうちの一つが木喰上人のこのうたです。木喰がやはり円現というようなことを言ってます。

「木喰の袈裟や衣が破れても、破れ衣、破れ袈裟であっても、弥陀の本願は破れてはいないのである」

と。私たちは破れていながら、天衣無縫である。

そこで今朝はもう、終末のところであります。かつて、手島さんと関根君と三人で、東京のまん中で講演をした〔註：１９５１年12月15日、神田教育会館での降誕節特別講演会。「曠野の愛」誌11号、12号に「悲願霊願」所載。著作集第3巻『無の神学』／第2部「無の神学への道」／第6章へ転載〕。その時に、私は「悲願霊願」と題したら、手島さんが、

「小池先生はやっぱり素晴らしい表現をする」

と私に言いました。

汝の御意が「本願」です。私たちはやはり東洋人で、日本は仏教的なものがしみ込んでいるような所ですから、この偉大な福音は仏教を包んでしまう。それで、自在に使わしていただくわけです。

ペテロ前後書。ペテロは非常に実存のことを、世の終りの希望を、切々と懇々と語っている。ヒルティーさんが、ある意味において、そういう人でしたが。やはり、ペテロは本当にここで円熟しています。彼は何も神学を語っているわけではない。自分の体験から自由に書いております。どうぞ、いつか、落ち着いて読んでみてください。このたびはペテロ一点張りで、ペテロに現れたキリスト・聖霊一点張りで、終わるように導かれたことを感謝しています。

この手紙は、小アジア半島の――キリキヤ地方だけは抜かした――諸地方の教会への手紙で、ペテロはもちろんあの辺を伝道したことが、パウロとは別にある。彼はもちろん、エルサレムの本山の中心人物となった。キリストの兄弟のヤコブは、始めはキリストを、兄さんを認めなかった。しかしながら、やがて、本当にエルサレムの本山の中心となり、ヤコブは殉教の死を遂げます。その後を承（うけたまわ）っていたのがペテロです。ペテロも、やがて出掛けて行って、遂にはローマへ行きました、パウロと同じように。かしこにおいて、有名な『クォ・ヴァディス』の話があるように、ローマにおいてパウロと同じように、ネロの暴虐な王様のもとで、逆さ十字に架けられたといわれている。

聖霊のペテロが御霊の愛をもって、いかに切々と語っているか。何といっても、この聖書は驚くべき書です。一句も無駄がない。

●活ける石

ペテロ前書2章に、

「1**されば凡ての悪意、すべての詭計（たばかり）・偽善・嫉妬および凡ての謗（そしり）を棄てて、**
2**いま生まれし嬰児（みどりご）のごとく霊の真（まこと）の乳を慕え、之により育ちて救に至らん**
為なり。3**なんじらは既に主の仁慈（なさけ）あることを味い知りたらんには、然（しか）すべ**
きなり。4**主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。**」（ペテロ前2・1～4）

これは初心者に向かって聖霊の事態を、「乳を慕え」と言った。賀川豊彦の詩に『天の乳房』という詩がありますが、そのように「霊の真の乳を慕え」ということです。

「主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり」

「リビングストーン」「活ける石」という表現は、ペテロが初めてここで使いました。石だとか岩だとか言う。これはイスラエルにはもの凄い断崖だとかが本当にあるから。

「主は貴き活ける石である」

と言った。石はもちろん磐石不動の姿です。これに躓けばダメだが、しかし、

「これに依頼むものはあわつることなし」（イザヤ28・16）

とイザヤが言っているとおり。活ける石はもちろんキリストです。「千歳の岩」というのは、こういうようなところから発想したものです。

「人には棄てられたまえど」

という。ある意味において、神様にすら棄てられざるを得なかった。

「5**なんじら彼にきたり、活ける石のごとく建られて霊の家となれ。**

「ごとく」というような訳は、私はむしろ「らしく」と言いたい。

「活ける石らしく建てられて霊の家となれ」

と。「霊の家」とか「霊の宮」とかいう。家も宮も同じことです。私たち一人びとりが、パウロも言っているが、「幕屋」という。群が幕屋であると同時に一人びとりが幕屋である。

「この幕屋が破れたら、天において破れない幕屋をいただく」

という。霊体のことです。

これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲を献げん為なり。6聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依り頼む者は辱しめられじ』とあるなり。」（ペテロ前2・5～6）

これはイザヤ書の28章から引用した言葉です。「隅の首石」を、土台石というような具合に私は日本的に日本人に感ずるように言いたいところですが、首石はもちろん歴史的には頭石なんです。上の方にある。これが外れると家がおかしくなってしまうわけです。

「家造りの棄てた石が隅の首石となる」

という。

●人間の福音的実存七相

ところで、「人間の福音的実存七相」として、

一、「破れ」
二、「砕け」
三、「突破・突入」
四、「内住・常燃」
五、「担い・抱き」
六、「棄身・棄石」
七、「本願・栄光」

の七つの相がある。キリスト者の実存はこの「七相」をもっている。もちろん、他のようにも表現できるでしょう。私はこのように表現せざるを得ない。時間的にこういうように展開していく。それから、現にこの全部をもっている、という二つの消息をもっている。

聖霊の実存はそういう七相をもっている〔註：１９７５年10月発行の著作集第一巻『無者キリスト』第二部「人間の福音的実存七相」に詳述〕。

先程の破れ器です。

「袈裟は破れても本願は破れない」

という。我々はみな破れである。パラダイス・ロスト〔楽園喪失〕の存在は、罪びとは破れにすぎない。

「償い方なし」というが、これは「繕い方なし」なんだ。繕っても破れてしまう。キリストが仰ったように「新しき皮袋」でなければダメなんだ。その破れを破れないような顔をしているのが、あるいは、破れないように何とかしようとしているのが、教育や政治や経済や事業という、人間が営む文化文明なんだ。これがこの繕いを一生懸命でやっているわけだ。そして、全きものにしようとしている。ところが、見てください。20世紀の文化文明は、そんなに素晴らしくなりましたか。危険きわまりない。人間が破れを繕うとしたって、ダメだということをはっきり示している。あるいは傲慢にもバベルの塔を建てようとして、その人間の奢り高ぶりはひっくり返される。

「人工的なもの、人為的なもの、それはいかん」

といって、悟りの世界に行こうというのが仏教の世界です。

「新しき創造に行こう」

というのが、この福音の世界です。しかし、ある意味において、この両面が大事なんです。東西融合、それは本当の福音ならそれができる。ゲーテが何故大きいかというと、東西を融合するからです。

「オリエント〔Orient 東方世界〕もオキシデント〔Occident 西方世界〕もみな神の有である」

と彼は言った。ゲーテというのはとにかく、

「神・自然・我」

というものが融合しているような魂です。

この、しょうがない繕いを一遍ぶっ壊してしまう。しかし、これが砕けないんです、人間はいくら砕けても。砕けたる魂、砕けたる心は一応ありますよ。けれども、これがどうにもならん。

そこで、イザヤ書53章は、キリスト自らが砕けたもうた。神がキリストを砕きたもう。キリストは我々の為に砕け給う。我々はそれによって砕かれてしまった。自我がすっ飛んでしまった。

「現実がどうである」

と、そんなことを言っているのではない。もっと根元の世界を言っている。そうして、自我から解放されたが、

「それだけでは空き巣だから、ヘタするとサタンがやって来て、前よりも悪くなる

ぞ」

なんて、キリストが仰った。そこで、入ってくるのは――私たちが突破するのではない――上からやってくる。ペンテコステは、こっちから何か祈り込んで、天を突き破ったなんていうのではない。祈っていたら、上から突き破るものがやって来た。「突破突入」するものがやってきた。そこに集まっている人を突破して、その中に突入してしまった。それが聖霊です。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人の有（もの）なり」

これを、

「恵福（さいわい）なるかな、我が十字架によって霊が全く貧しくされた汝、天国即ち聖霊の我れ、汝の中にあり」

と受けとったときに、私は畳の上に平伏してしまった。それから、キリストの言葉がグッと楽に読めるようになった。

この突破突入で、それで浮いてしまったらダメなんだ。ヘタすると、

「あれは本当だったのだろうか？」

なんて。それが常燃の火として燃える。燃える時には、バッと爆発的に燃えていい。そういうところに体裁は要らない。その後が大事なんです。これはヒルティーも言ってます。

その後で、

「御霊を消すな」

と、パウロが言っている。

「御霊を消すな、常燃の火として燃やしていろ」

と。私が「常燃の火」というのは、常に何をしていても――なにも意識することはない――心が祈り心ということ。口で「主さま！」と言わなくても、魂が

「主さま！」

と言って交わっている世界です。もし、御霊が抜けると、もう論より証拠、魂の世界はごまかしがきかないから、これはおかしなことになる。人間の構造というものは、ある意味においては、複雑怪奇なものだけれども、しかし、いつも何が本当に中心になっているか。ダルマさんはいつも、いくら揺れてもまた起き上がる。磁石はいくら揺れても北を指す。そういう、磁性、霊性、御霊の霊性がさびついてしまって、霊性にコケが生えているようなことになったならば、これは本ものです。

「枯木竜吟（こぼくりゅうぎん）」

という。枯れた木が風を受けて、ウ～～と唸っている。竜が吟じているようだという。そういうことになると、愛の力ですから――本当の力ある愛ですよ、ただ感情的な愛ではない――実力をもっている。愛は最高の力をもっている。世の中に愛ほど力強いものはない。コリント前書13章です。私はあれを『福音の心臓』〔１９６４年８月１日発行。１９５７年８月

夏季特別集会での聖書講筵の録音を基として書いたもの」と題して、曠愛新書の第1巻にしたのは、そういう意味なんです。

「担い抱き」。キリストの担い、キリストの抱きが私たちの質となってくる。何と言われてもいい。その人のために祈れる。どんなに迫害され蹴飛ばされても、

「どっこい、こっちが担っていますよ」

と。地上では誰にも理解されず、顧みられず、あるいは誤解され迫害される。しかし、

「汝（神・キリスト）知りたもう」

という世界です。本当の平安というものは、そのような力をもっています。

担い抱きというけれども、我々は相対的存在で、質的にはもの凄いものがあるが、量的にはどうにもならん。それで、担い抱きは、十字架がここに来ているわけです。

「己を棄て、己が十字架を負いて我に従え」

と。十字架を負えるんです、聖霊が来ているから。聖霊が来ていなければ、十字架は負えない。

「我が荷は軽し」

と、キリストが言われた。それで「棄身棄石」という。殉教といってもいい。キリストは棄てられたる石。それが「隅の首石」となった。棄てられたる石となるときに、初めて本当に天国を築くところの石垣になる。城となる。城壁となる。そのような棄身棄石は、黙示録21、22章にいくと、天のエルサレム、シオンをつくるところの宝玉となります。もちろん、これはみな比喩的な表現です。人間が石になるのでも何でもない。天上に於いて輝くのは、キリストの栄光が輝いている。その人らしく輝いている。天において、その人らしく、キリストの栄光が輝くためには、この実存を身において本当に証していく。

我は「破れ」なり。我は「砕け」なり。聖霊は「突破」しつつ進みたもう。「常燃」の火はいよいよ燃えていく。「よしっ」と言って、「担って」いく。キリストと共に本当にそこにぶっ倒れる、「棄て」られる。天上に於いては、それは驚くべきキリストの「栄光」体となる。それがキリスト者の相ではありませんか。

「わが心、定まれり」

と。もうこれで行こう。この他に道はない。これは本当にもの凄い豊かな、およそイズムや何かでもって限定することのできないものです。皆さん、本当の自信をもってください。本当の自信をもてば、地は揺れるよな。地震になる。天震地震と言ってもいい。この天震地震を起こして、新天新地を来たらしめるところの実存が、このようなキリスト者の存在的な、実存的な祈りであります。

リュッケルト〔ヨーハン・ミヒャエル・フリードリヒ・リュッケルト（Johann Michael Friedrich Rückert 1788～1866）ドイツの詩人、東洋学者〕の詩に、

「その言葉も思いも業も、全生涯が祈りとして、

天上に一つの霊気となって昇りゆけ」

とあったように。

一、「破れ」
二、「砕け」
三、「突破・突入」
四、「内住・常燃」
五、「担い・抱き」
六、「棄身・棄石」
七、「本願・栄光」

これは福音の大事な構造で、人間の「福音的実存の七相」です。「七」という数は天的なすがたをいう。

●此岸を彼岸として生きる

「二つなき心を君にとどめおき　われさえわれに別れぬるかな」

という昔の歌があります。これは恋歌かも知れないけれども、そういう心境は、キリストに対する我々の恋愛は、愛は――「恋」の字はなくていいけれども、しかし、パウロも「恋い慕う」なんて書いている――もう自分が自分でなくなってしまっている。

「我さえ我に別れぬるかな」

と、無我です。無我となれば、本当に君の中に心がどっかりととどめ置かれてしまう。キリストの中に内住して、懐に住まってしまうということは、そのような、己を棄てた愛である。詩篇73篇に、

「天にも地にも、汝の他に慕うべきものなし」

とあるように。

「7 **万**（よろず）**の物のおわり近づけり、然ば汝ら心を慥**（たしか）**にし、慎みて祈りせよ。」（ペテロ前4・7）**

20世紀は正直、危ない。危ないけれども、心配は要らん。どうなっても、神の国は必ず来る。我々は天にあげられる。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

と、これは大好きな言葉です。私は、自分がもし死んだら、墓碑銘にはそう書いてもらわなくては。

「こちらはよい所だから、早く来ないさい」

と。彼岸人です。此岸（しがん）を彼岸（ひがん）とする。彼岸をただ憧れているのではない。本当の彼岸人は此岸を彼岸として生きている人。我々は天国人、彼岸人であります。

「国籍は天にあり」

「ここは仮りの宿で、我々は旅人である」

と、パウロもペテロも言っている。だから、私は「幕屋」と言う。

「万の物の終わりが近づいた、うれしいなぁ」

と言わなくてはいかん。

「もう直き天国が、神の国が来る」

と。というのは、私たちの中に神の国がきて、もう昨日から天国だものね。我々は天国の前味を賜った。これは徒らではない。一時の感激ではダメです。燃えたら、常燃の現実としなくてはいかん。

ゲーテという人は、

「私はただ思い出に生きない」

と言った。彼は過去を必ず現在に生かしている。そのようにして過去を話すなら、それは本当に意味はあるが、ただ過去を妙な郷愁で懐かしんだって、それはダメだという。

キリストの十字架を、現在において、現在完了として受けとりつつ進んでいく。それから、ペテロの書簡のように、将来を、終末の世界を、これをまた現在化（フェアゲーゲンヴェルティゲン vergegenwärtigen）して、

「御国は我が内にあり。故に、終末の世界は本当に、何がどうなっても、これは来る。我らはそこの人である。この永遠の生命をいかんせん」

というわけです。

●愛は掩い包み担う

私はしゃべっていても、時々、黙りたくなってしまう。グーッと来てしまうから。人間は言葉が多すぎる。話も簡単な方がいい。大自然を見てください。何かしゃべっていますか。何もしゃべってない。けれども、大自然は素晴らしい。これはちゃんと詩篇19篇に書いてある。

「1**もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす。2この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。3語らずいわずその声きこえざるに、4そのひびきは全地にあまねく、そのことば地のはてにまでおよぶ……**」（**詩篇19・1～4**）

これは何という素晴らしい句かと思う。あなた方はこういう詩篇なんかは文語訳で読みさいよ。あの口語訳は気がぬけてしまうよ、「…であろう」なんて言われるとね。

凡て、現在なんだ。過去も未来も現在化してしまう。非常にずぶとい信仰です。その現在は永遠であるからです。私はいつ死ぬかと思うね、こんなに余り勢いがよすぎて。

「8**何事よりも先ず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩えばなり。**」（**ペテロ前4・8**）

「はい、愛せざるを得ません」

と答えてください。

「できるかなぁ？」

ではない。もう、このキリストの愛の生命がきたら、私はみんなに一人びとり、抱きついてあげたいくらいだよ。それから外れたひとは、

「先生はちょっと不公平なようだ」

なんて、そうじゃないよ、ちっとも。ちゃんと顧みざる顧みというのがある。不公平と言うなら、キリストだって多少不公平だった。ヨハネばっかりが、

「キリストの胸によりそい、愛せられたる弟子」

なんていう。まぁ、それは半分冗談ですが（笑）。

「何事よりも先ず互いに熱く相愛せざるを得ないね」

ということ。ヨハネ書簡には散々、愛のことが書いてある。それは互いに、決して枠をつくってはいかん。どんどん知られない人の方にまで、この愛は展開していく。

「敵をも愛す」

のですから。

「愛は多くの罪を掩えばなり。愛は凡ての愆を掩う」

と、「箴言」の中にあります。愛は掩い包み担ってしまう。キリストはしょうがない私たちを十字架で背負ってしまいましたから、キリストは罪びとである私たちを見ません。

イエスは私たちの、それこそ、満月に完成するその姿を見ておられる。三日月において満月を見ておられる。しかも、その満月は決して類型的な満月ではない。一人びとりみんな質が違う、色が違う。あるいは、虹の一つ一つの粒といってもいい。あれは無限の色をもっている。私はその点で、虹が好きなんだけれども。

「わが胸は欣び躍る、大空に虹をし見れば」

という、あのワーヅワースの詩のとおり。

そのようにして、愛はみなこれを消してしまう。人の罪を見てどうのこうのと、結果を見てどうのこうのと指摘するのはサタンの心。その人の善いところを見て、本当にその人を憶えることが天使の心です。

●御霊の自由

「9また吝むことなく互いに懇ろに待せ。10神のさまざまの恩恵を掌どる善き家司のごとく、各人その受けし賜物をもて互いに事えよ。」（ペテロ前4・9～10）

ここに「仕えろ、仕えろ」と三回も書いてある。

「クリスチャンは万人の奴隷である」

と、ルターが『クリスチャンの自由』の中で言った。

「クリスチャンは凡（すべ）ての者に対して自主のものである」
「クリスチャンは凡て者に対して奴隷である」
という、絶対矛盾の自己同一。これは何も矛盾ではない。よく自主だとか自由だとか言うけれども、福音の世界に来ないで自主だの自由だのと言えない。キリストという主があるから、私たちはその僕である。

「汝の御意（みこころ）を、どうぞこの僕を通して、成してください」

というのがキリストの実存で、あのイザヤ書の「エホバの僕」の預言の通り、キリストはそれ以上に生きられた。絶対者に、神・キリストにだけ依存しているのだから、これは自主なんだ、自由なんだ。相対的なものに依存していないのだから。絶対者と一如の世界だから、これは本当に絶対的な自由がきている。

「但し、罪びとだから思い上がってはいけませんよ」
ということ。その愛が来るから、罪から十字架で解放されて、愛の聖霊が来るから、これは流れていく。罪からの自由であると共に、愛への自由である。愛への積極的な自由です。自由には消極面と積極面がある。即ち、愛への自由は、

「あの人を担（にな）ってあげましょう」
と、これが愛なんだ。愛するとは相手を助け担うことであります。だから、そのようにして担い助けることを

「仕えよ」
という。「仕えよ」という言葉は、何かちょっと多少、卑屈にひびくようだけれども、「奉仕」ということは、キリストの自由をもって御霊の自由、自由なる御霊をもってやっていく、担っていくのだから。そういうのが本当の愛なんだ、担いなんだ。だから、一本なんだ。

「自主であることは必ず仕えざるを得ない、担わざるを得ない。それでなかったら聖霊ではないぞ」
というわけです。力ある愛は担わざるを得ない。

「すべし、すべからず」
ではない。

「ざるを得ない世界」
が本当の世界です。これを霊法という。霊の法則、霊法は自由で、ひとつも決まっていない。無限軌道をもっているようなものです。

だから、私は空を飛ぶ鳥が好きなんだ。何もレールがない。立体的に自由自在。燕（つばめ）なんてのは、180度くらいの気持で、パッと転回して、ヒューッと飛んでいく。人間の造った飛行機はどれができるか。そんなことをしたら、みな落ちてしまう。まず、自然は素晴らしい、神様の創造の世界は。活きている世界だから。都会の人は時々、大自然を本当にみて、大自然と一つにならなければ。嵐がくれば嵐となり、雨がくれば雨となる。

掴みどころがないですよ、私なんていう人間は。

「小池先生というのはこんな者でした」

なんて言ったら、承知しないから。そんな限定なんかできないんだ。

キリストにある者は無限定の世界です。もし、それを本当に表現しようとするならば、それは音楽かドラマくらいのものだろうね。

今日は第四楽章だから、ベートーヴェンの『第九シンフォニー』に負けないつもりでやっている。第二楽章でちょっと抑えておいた。ちゃんと、あるんです、そういうものが。私は音楽がわからなくたって、多少そのくらいの気持は分かっている。「躓きのペテロ」でちょっと抑えておいた。

●無者らしく

「11もし語るならば、神の言を語る者のごとく語り、事うるならば、神の与えたもう能力を受けたる者のごとく事えよ。是イエス・キリストによりて事々に神の崇められ給わん為なり。」（ペテロ前4・11）

「神の与えたもう能力を受けたる者のごとく」

ではない。

「神の与えたもう能力を受けたる者らしく仕えなさい」

ということ。コリント前書の1章にも、「無き者のごとく」なんて書いてあるが、あれも「無き者らしく」なんだ。「無者らしく」ということ。

「無者」

という言葉はいい言葉だ。

もう、大丈夫ですよ、心配いらんです。どしどしやってください。みな、一人びとり、神様から賜った段階がある。法則がある。聖霊の世界の祈りだけは深めていきなさい。私たちには無学の凡人のペテロが一番、ある意味において近い。

特に我の強い人は、パウロをよく読んでください。ひっくり返らなければいかんから。私は、パウロを読めばパウロとなり、ヨハネを読めばヨハネとなり、ペテロを読めばペテロとなる。非常に柔軟な魂だから。

「12愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、

これは迫害のことです。

13反ってキリストの苦難に与れば与るほど喜べ、

懇ろに語っているね。

「苦難に与かれば与かるほど喜べ」

と。喜ばざるを得ない。これはパウロもペテロも同じです。パウロももの凄い苦難にあった。

コリント前書11章のところに書いてある。あれだけの諸々の苦難にあいながら、パウロは死ななかった。九十九死に一生を得て動いている。普通の人だったら、パウロのようなあれだけの苦難にあったら、みなぶっ倒れてしまう。熾（さか）んなるキリストの霊です。だから、

「これでいい」

なんていう世界はない。無限無量です。

「限りなく追求する」

というのは、満つるからいよいよ追求するんです。欠けていくから追求するのではない。満たされつつ追求してやまない。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。

これは再臨のときです。キリストの再臨の時に、天界において本当に喜び楽しむ。天界におけるところの大合唱はヘンデルもベートーヴェンもかなわない。

14**もし汝等キリストの名のために謗（そし）られなば幸福（さいわい）なり。**

「わが名のために凡ての人に憎まれん。終りまで耐え忍ぶ者は救わるべし。」

とキリストは言われた。妥協したらダメだよ、これだけの福音を戴（いただ）いたら。本当に生きがいのある生き方を決然としてください。妥協するということと、包むということは別問題です。包むとか、担うというのは決して妥協することではない。

栄光の御霊（みたま）、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」」（ペテロ前4・12～14）

「栄光の御霊、すなわち神の御霊、キリストの御霊が汝らの上に常に留まっているからである」

と。まぁ何と、ペテロでもパウロでもヨハネでも、その書簡では聖霊のことを語っていることでしょうか。

そういうことで、これだけの句をあなた方とゆっくり読むだけでもうたくさんなんです。

●再臨のキリストを迎える

それから、ペテロ後書の方へいきます。ペテロ前・後書は紀元63、64年頃に書かれたものらしい。ペテロ後書1章、

「12**されば汝らは此等のことを知り、既に受けたる真理に堅うせられたれど、我つねに此等のことを思い出（いだ）させんと為（す）るなり。**13**我は尚（なお）この幕屋（まくや）に居るあいだ、**

「幕屋」というのはこの肉の身体（からだ）のことです。

汝らに思い出させて励ますを正当なりと思う。

時々、こうやって勧めをするわけだ。

14**そは我らの主イエス・キリストの我に示し給えるごとく、我わが幕屋を脱**

ぎ去ることの速かなるを知ればなり。」（ペテロ後1・12～14）

もう殉教の時は近いということを知っている。永遠の生命を本当にもっているから、彼らは最早その死を恐れない。これはいい加減な気持ではない。本当に祈りが深くなって、本当に御霊の人にならなければ。御霊が時々くる位のことではダメなんだ。

「16**我らは我らの主イエス・キリストの能力と来りたもう事とを汝らに告ぐるに、巧みなる作話を用いざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。」（ペテロ後1・16）**

キリストの栄光を、権威をはっきりと見た。復活のキリスト及び御霊が来てから――今まで分からなかった、キリストと一緒に居た――あの福音書の事態が本当にいかに神の栄光の現れかということに初めて気が付いて、

「『今は分からないけれども、今に分かるぞ』とキリストが仰ったのがこれだ」

という事をペテロもはっきりと受けとったわけです。

まぁ、人生というのはそのようなものですよ。私は兄貴が死んでから初めて、兄貴の終りの数年というものが、本当にこの信仰の世界にきてから分かった。私はあの時よりか、兄貴は近いですよ。私の生涯は兄貴の弔い合戦だもの。

「17**いとも貴き栄光の中より声出でて**

これは変貌の山の事をペテロは思い出して言っている。

『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』と言い給えるとき、主は父なる神より尊貴と栄光とを受け給えり。」（ペテロ後1・17）

「こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ」

というあの言葉。これはキリストがお聞きになったが、今度は私たちがこれを聞かなくては。そして、この喜びを、この愛を人に与えていかなくては。喜びの人は喜びを人に与え、愛の人は愛を人に流していく。それでなければ、喜びも愛も窒息しますよ。

「19**斯て我らが有てる預言の言は堅うせられたり。汝等この言を暗き処にかがやく燈火として、夜明け明星の汝らの心の中にいづるまで顧みるは善し。」**

（ペテロ後1・19）

「明星の汝らの心の中にいづる」というのは、再臨のキリストの姿が汝等の心に本当に映ってくる。

「御霊をいただく」

ということと、

「再臨のキリストを迎える」

ということが、終末的信仰では、重なり合ってくる。信・愛・望が一如の世界になる。バラバラではない。この信仰は本当に有機体的なんです。

「21**預言は人の心より出でしにあらず、人々聖霊に動かされ、神によりて語れ**

るものなればなり。」（ペテロ後1・21）

聖書はそのようなものである。

「8**愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前（みまえ）には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。」（ペテロ後3・8）**

なんとなれば、永遠の今をつかんでいるからである。相対的な、何日だとか何年だという世界を超越してしまう。永遠の生命です。明日ぶっ倒れたってアーメン・ハレルヤです。

ヒルティーさんは椅子に腰掛けていて、娘さんがコーヒーを取りに行って、戻って来たら、もう向こう側の人だったという。ゲーテさんもそれ式です。全然、悩みも苦しみもない。眠るがごとくに知らない間に逝（い）った。

本当に生きていれば、生きがいのある生き方をしていれば、余り永いこと病床にあることはないでしょう。そういうように神様はなさるでしょう。しかし、病床にあったっていいよ。病床にありながら、蒲鉾（かまぼこ）みたいになっていながら、人を助けることも祈りの世界ではできるから。どんな現実にあっても、絶対へこたれない。あんなに穏やかなようなヒルティーが、

「一番本当の死に方は、畳の上でなくて、人のために尽くしながら仆（たお）れる仆れ方である」

と言っている。ヒルティーはゴルドン将軍のことを非常に評価しています。あの人は本当に愛の人でした。

「8**愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。」（ペテロ後3・8）**

然りアーメンです。時間を超越した世界。時計は要らない世界です。

「9**主その約束を果たすに遅きは、或人（あるひと）の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改（くいあらため）に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。」（ペテロ後3・9）**

いかにもして人を救わんという、万人救済の本願をもっておられる。「選び」ということも、聖書の中にも言ってあります。カルビンがそれを「選びの神学」式なことを言ったけれども、先に選ばれたのは他の人を救う使命をもって選ばれているのであって、自分が善いから選ばれたのでも何でもない。むしろ、しょうがない奴がみんな選ばれている。

内村先生が、戦場ヶ原の会話のところで、

「私みたいな奴が救われるのだから、万人は必ず救われる。私みたいな罪びとの首（かしら）が救われたのだから、万人救済という祈りは、悲願は当然なんだ」

と言った。内村先生も自分をしょうがないと思ったから、十字架がなければ先生も生きていられないんです。内村先生の言葉というのはとにかく、陳腐（ちんぷ）なことは言っていません。切れば水が迸（ほとばし）る、血が出るような言葉です。内村先生の魂はいつわりでないから、本当に自分のその時思ったことをバーッと言う。

●パウロからの示し（異言）

そのようにして、二千年もまだ延びているのは、いかにもして人を救わんがためであったが、どっこい、人類は段々悪くなってきた。もう、神様は、

「もうしょうがない、これではどうにもならん」

と言って、どこかで、羔（こひつじ）の怒りがくるよ。そうしたら、最後の終末がやってくる。

「羔の怒」

というのは黙示録の中に出ていますが、もう堪忍袋が切れてしまうわけだ。

「こんなに待っているのに、どうして、聖霊に背くか。人類は神を無（な）〇みするか」

と。審判は人類そのものが来たらせるのであって、神様が来たらせようなんて思ってやしない。

そういう深刻な祈りを、今から数年前〔１９６８年夏〕に京都の三光会館で、私と４人位で祈っていた時に、梅村君が非常に高次な異言の世界に入った。

「君、それを書いてごらん」

と言ったら、こういう分けの分からないような文字を書いた。そして

「訳してごらん」

と言ったら、スラスラと訳したから、その内容を皆さんに今、紹介します。

「主は言われる。主に在りてよろこべ。主に在りて悲しめ。主の御意をのみ為してください。為しなさい。主と共にあれ。

世界は滅びる。世界は滅びる。悔い改めよ。主にもどれ。主にもどれ。戦さが始まる。すべての人々はみんな死ぬ。地球は破滅する。全人類に未来はない。

ただ一つの希望は、今すぐに主に立ち帰るしかない。今という、今じゃ。今じゃ、今じゃ。伝えよ。主を伝えよ。選び召されし者たちよ、祈れ。主に用いられんことを。祈りなさい。

主は人類を愛される。愛するが故に、審かれるのじゃ。人類は、みずから破滅への道をたどる、自ら。よいか、直ちに、戻りなさい。直ちに、直ちに。

兄弟よ。主にある兄弟よ。主の悲しみを知れ。主の悲しみを知ってくれ。よいか。涙を知ってくれ。もはや我れ生くるにあらず。よいか。主の涙を知ってください。いいですか。

直ちに主にありて用いられんことを祈れ。祈ってください。――主の僕パウロ」

パウロからの示しです。私はそれを見ていて驚いた。そういう文字ならざる文字を書かせられた。これはただごとではないと思った。

キリストも聖霊も天界で呻き、嘆き、悲しみ、そして、これが怒りに変わったらおしまいです。それでパウロが、

「早く立ち帰れ、選ばれた者は道を伝えろ」

と、こういうことです。

●最後の日の予表

「10**されど主の日は盗人のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にある工とは焼け尽きん。11斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、12神の日の来るを待ち、之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。13されど我らは神の約束によりて（キリストの）義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。」（ペテロ後3・10～13）

ペテロの祈りはパウロと相通ずるものがある。私たちの望みはこの聖書が示しているところの、終末的な世界の、歴史の終りに来るところの、そこにしかもうない。地上にこのまま天国は来ません。けれども、

「明日、天地が崩れるということが、もし分かっても、私はリンゴの苗を植える」

と、マルチン・ルターが言った。すなわち、

「地上の仕事がどんなに空しいように見えても、天国の徴をそこに表せ」

ということです。皆さん一人びとりのその業がみな、天界の天国の徴なんです。どんなにそれが空しいように見えても、つまらないように見えても、天国の徴を、実存をもって刻んでいく。それが、本当に天国を待つ、神の国を待つ在り方です。

天地はひっくり返っても、この徴の現実は天界において成就する。キリストが福音書でもって、なさった全ての言葉と業は全部、最後の日の予表である。徴である。

だから、ゲーテがあの『ファウスト』の最後に、

Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis;
Das Unzulängliche,
Hier wird's Ereignis;
Das Unbeschreibliche,
Hier ist's getan;
Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan.

「過ぎゆくものはすべて
　映像にすぎず。
満ち足らざりしもの
　ここに円現し、
名状しがたきもの

ここに成就せり。
永遠の女性
われらを引きあぐ。」

と言った。

「今まで到達し得ないものが
ここでは成就するのである」

と。ゲーテはあの『ファウスト』の最後で本当に天界の現実を歌っている。素晴らしい言葉です。

「永遠に女性的なるもの
我れらを引きあげていく」

と。どこへ持っていくんですか。ゲーテは書かなかったから、私は、

Mit Lirb' und Wonne
Zur heiligen Sonne!
「愛と歓びをもって
聖なる太陽へ！」

と、そういう句を付け加えた。

「永遠に女性的なるもの」という意味は、キリストは永遠に女性的なるものです。ということは、キリストは神様に本当に従った。善き妻は夫に本当に従う。キリストは神様に本当に従った女性道なんです。従順に、

「十字架の死に到るまで従い給えり」

という。己を空しくして。さっきの「ケノーシス」〔kenosis〕です。己を無にしている。そして、その女性道を歩く人がまた本当の男性道を歩いている。キリストほど男らしい男がいるか。あの、

「**恵福**（さいわい）**なるかな、……**」

といって、非常に弱そうなことを仰っているが、どっこい、あれはニーチェがとり損なった。

「**右の頬**（ほお）**を打つ者に左の頬を向けよ**」

というのは、本当の勇者でなければできない。打ち返す奴は大した勇者ではない。だから、女性道と男性道はピタリ一つなんです。本当に受けとるという、この女性道を本当に行ずる者は、神様の驚くべき力がきますから、最大の勇者となる。キリスト以上の英雄がどこにいますか。いくら英雄でも、ナポレオンでも皆かなわない。

「イエスには参りました！」

と。それは、もの凄い神様の生命力と光と愛の力が彼に漲（みなぎ）っているから、キリストさまには適（かな）わないですよ。

「イエス・キリストの前には無条件に頭を下げる」

とゲーテが言っているとおりです。みんな「ゲーテ、ゲーテ」と言っているけれども、なぜ、キリストに来ないか。そしたら、ゲーテでもダンテでもドストエフスキーでも何であろうと、みんな掴んでしまう。政治の世界であろうと、経済の世界であろうと、一番根底はこの福音にある。それが本当にその人において消化されると、一番本当のものがそこに出てくる。

●（詩）「国民の歌」

それだけの宇宙的なキリストを、イエス・キリストという福音体そのものを、何をもって私たちが多言を弄して説明することができるか。

そういう終末の世界を私たちは今、現に戴いていますので、私ばっかりが彼岸でない。あなた方がみな彼岸人である、天国人である。だから、本当の平安と力をもって地上を歩いていくことができる。

「何でもきてみろ」

と。いいかね。辛いと思ったことが、ちっとも辛くなくなってしまうよな。本当の祈りの世界にいけば、眠らなくたって大丈夫だよ、肉体には限度もあるけれども。

私は大分前（１９５３年６月９日作）に、日本に対する悲願をもって、「国民の歌」というのを書いた。

一、世紀の嵐吹くなべに
　さゆらぎもなき富士の峯
　秋津島根の民草よ
　能力を現はす期は今
　思想百錬、社会も個人も
　文化に資する創造の
　生業多に産み成さん。
　祖国の前途に栄光あれ！

二、大地の愛を胸に秘め
　噴煙絶えせぬ火山国
　大和島根の国民よ
　愛を生くべき期は来ぬ。
　嗚呼、憎しみの闇の世や
　愛しみの火明々と
　万民の胸に点さなん。
　祖国と世界に歓喜あれ！

三、青史の絵巻、幾千年
　湖心に宿る琵琶の月

天賦ゆたけき国民よ
天啓具現の期（とき）近し
嗚呼、苦しみの渦の世や
地の極（はて）までも身を挺し
世の末かけて祈らなん。
あまねく世界に救あれ！

だけど、今の日本を思うと、破りたくなる。
そういう意気込みで行きます。どう思われてもいい。全生涯をキリストにあって、本当に燃やし尽くして、御霊の火となって行きます。おわり。